《 説明責任すら果たそうとしてこなかった 》

2008 年 2 月 18 日

自然愛・環境問題研究所
代表 浅野 隆彦

「果たす」というのは、完遂することである。
理解が出来ない、納得できないと多くの質問が集中した。当初、誰しもが呆れる「素っ気無さ」の分かりにくい説明と回答が主流であった。傍聴者たちには白黒の資料が配られ、カラーで色分けされているので判別つけ難い代物に皆が難儀したものだ。写真などは特に見え難い。委員会、ギャラリーから不満が続出し、再質問・再々質問が続いた。「これではキリがない」と近畿地整は大動員を掛け、対応に追われる事になった。その真意が、「平成 20 年度中に淀川水系河川整備計画の策定を成立させる」所にあった事は間違い無いと、私は見ている。しかし、未だに「多くの疑問」が「宙ぶらりん」状態である。

「答えられなかった事」＝私への分。
1） 基本高水を選定する手順における「確率・統計学」上の原理に反している問題。
2） 治水の基本的な考え方における「上下流バランス」の定義及び基準。
3） 川上ダム建設予定地の活断層トレンチ公開調査の実施。（これは口先だけで は説明にならない。）
4） 以上の外に何点かの重要質問は「個別に対応させて貰います。」として、引き伸ばしに掛けている。

「原案」の説明に対する疑問の最大のものとして、〔相関関係〕なるものを設定して想定・断定する手法がある。これが曲者である。

川上ダム関連では「岩倉観測所地点の H-Q 曲線（島ヶ原および旧長田川との相関）」、そして「大内観測所の流況（島ヶ原との相関）」など、都合よく、調子よく、俄かに信じがたい臭いがする。こう言った胡散臭いものが横行しているのは、「ダムの水質予測」もそうである。川上ダムの将来水質を予測するため、既設の比奈知ダムを「類似ダム」と見立てて「鉛直 2 次元モデル」を採用した観測が行われているが、この両者には大きな違いがある。流域の地質の違いから来ているのだが、比奈知ダムの方は「室生火山帯」のため酸性度のやや高い水質なので、オオサンショウウオが生息していないと言う事である。勿論、プランクトンも少ない訳だ。どうしてこうなるのか？川上ダムの将来水質予測で、数値を低く見せる為ではないか！という人もいる。

先ずは「本当に類似したダムに変え」て、相関関係を探らねばならない。それと、最近は「鉛直 3 次元モデル」を使っての研究・検討が進んでいる。コンピューターもどんどん大容量・大速度に為って来ているのだから、誤差を多く生むモデルを使うのではなく、確りした検討をやって貰いたいものである。こういった技術を開発した（独）土木研究所の研究者たちも言っている。『まだまだ、

様々の課題があり、精度を高めていく為に信頼できる「検証用データセットの整備」が望まれる。』すなわち、多くのデータとの比較・検証が出来ない現時点では、科学的判定が困難であるという事なのである。

「住民説明会」と言う名称は何処の会場で使っていたのか知らないが、「木津川上流意見交換会」（伊賀会場）は、昨年 10 月 21 日と 11 月 17 日の 2 回だけ開かれ、『
こんな中途半端なことでは説明責任が果たせられていないから、次の会を開くべきだ。』との声を封じるように、『後は河川事務所のほうへ、メール・FAX・手紙などでお願いします。』で終わってしまった。本当に「形だけの公聴会」を御付合いさせられたのである。第 1 回の時には「川上ダム対策協議会」「川上ダム対策委員会」「青山羽根ダム対策委員会」「水没予定地区移転者の方々」が動員され大挙参加されており、「ダム早期完成」を一様に主張されるという異様な状況で、原案の説明が分かっておられる方がどれ程おられたか？それは大いなる疑問であった。広範に多様な流域住民を集められないまま、形だけの説明会として 2 回で終わってしまった事で、流域関係住民への「説明責任を放棄している」近畿地整に対し、やり直しを要求するものである。